整理番号

D－1－4　518

標 題 名

農務局報第 19 号　稲二化性螟虫駆除予防奨励指針

著 者 名

発行者名

農商務省農務局

発 行 年

大正 10 年（1921 年）

製作年月

2025 年 7 月

寄贈図書
氏名 正郎 市松 駒

済

大正十年五月

農務局報
第十九號

稻二化性螟蟲驅除豫防奬勵指針

農商務省農務局

植物防疫
資料館
図書之印
50年7月4日
植物防疫
資料館

第一圖版　圖解

一、成蟲(雌)

二、成蟲(雄)

三、卵塊

四、卵塊(寄生蜂ニ侵サレタルモノ)

五、寄生蜂ニ侵サレタル螟卵色澤ノ變化

a、寄生蜂產卵當日

b、寄生蜂產卵三日目

c、寄生蜂產卵五日目

d、寄生蜂產卵七日目

e、螟蟲孵化後

f、寄生蜂羽化後

六、赤卵蜂

七、黑卵蜂

八、幼蟲

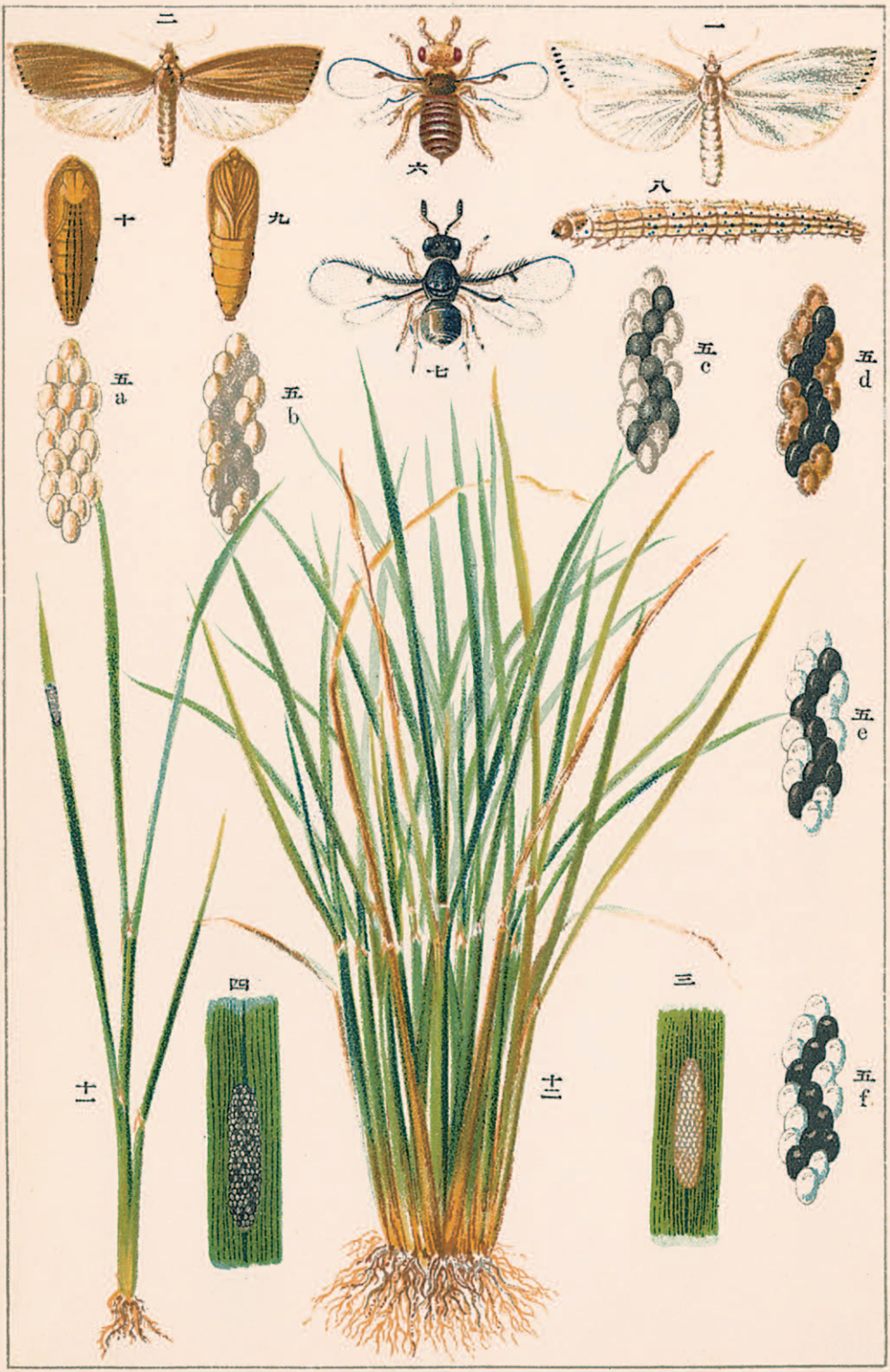
九、蛹(腹面)

十、蛹(背面)

十一、稻苗ニ卵塊附着ノ狀

十二、第一化期被害莖

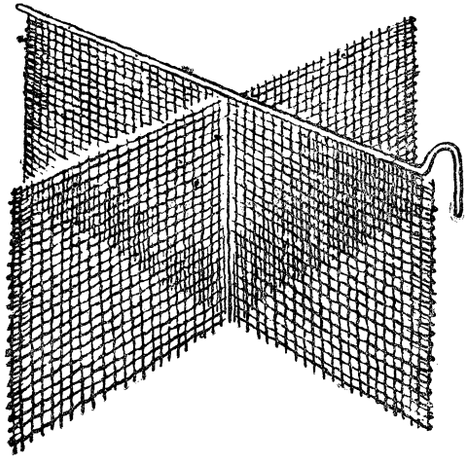
第一圖



第二圖

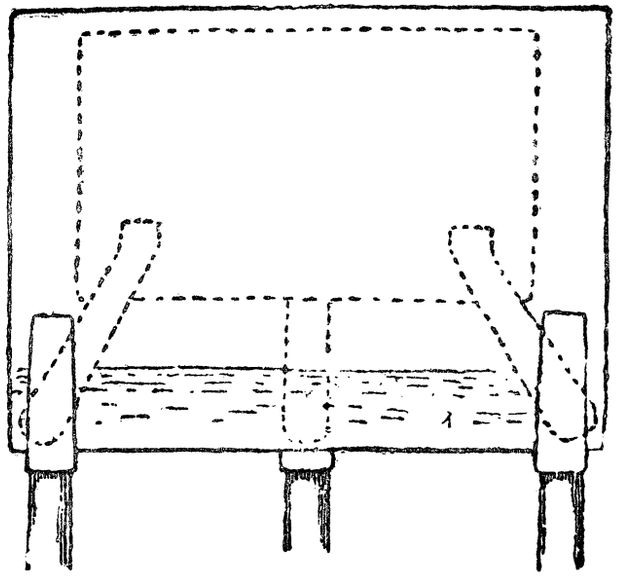
第三圖

香川縣ニ於テ使用セル益蟲保護器ノ圖解



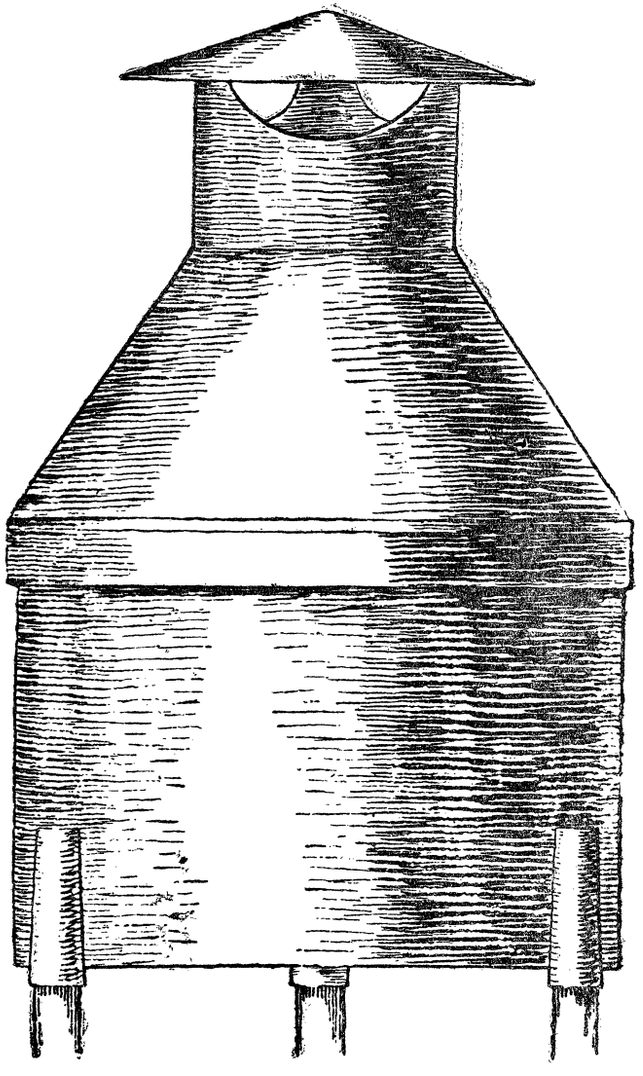
IV

III圖ノ點線ノ部分ヲ示ス



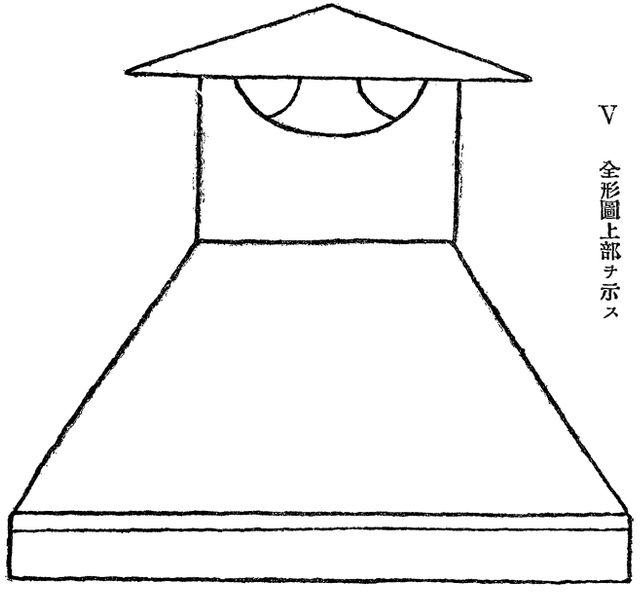
II

全形圖下部縱斷面
イ、水ヲ注ギ石油ヲ滴下ス
ロ、採取シタル卵塊ヲ入ル



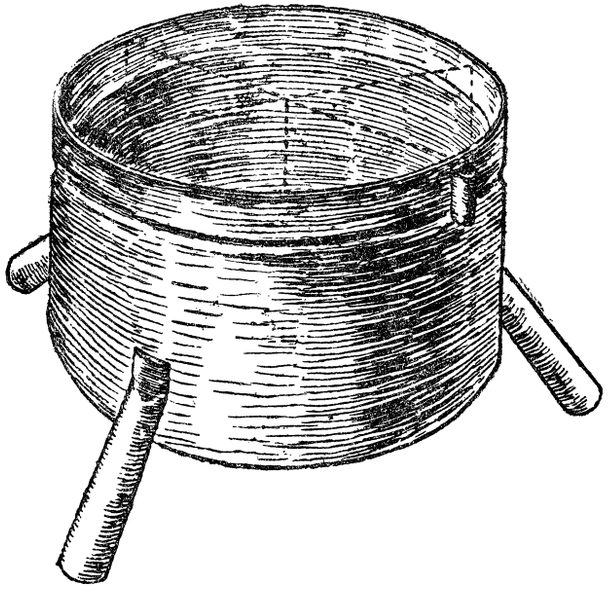
I

全形圖



V

全形圖上部ヲ示ス



III

II圖ノ點線ノ部分ヲ示ス本圖點線ノ部分ハ採取シタル卵塊ノ新シキモノト古キモノトヲ混合セザルタメ適宜區別シテ入ルヽニ便ス

稻螟蟲驅除豫防ニ關シ當局者竝當業者ニ對スル要望

本邦ニ於ケル稻作ハ近時著シキ發達ヲナシ米穀ノ改良增殖上刮目シテ見ルヘキモノアリト雖今後尙進歩發達ノ餘地甚タ多シ茲ヲ以テ一面ニハ積極的ニ生產ノ改良增殖ヲ促進スヘキ諸般ノ手段ヲ講スルト共ニ一面ニ於テハ各種ノ損害就中稻螟蟲ノ被害ヲ極力輕減スルノ方法ヲ講スルコト極メテ緊要ナリトス今本邦內地ニ於ケル米ノ生產額ヲ最近ノ統計ニ就テ見ルニ約五千七百萬石ニシテ假リニ螟蟲ニ依ル損害ヲ內輪ニ見積リテ其ノ百分ノ二トスルモ每年之カ爲ニ被ル國家ノ損失ハ百十餘萬石ニ上リ一石二十五圓トスレハ二千七百五十萬圓、三十圓トスレハ三千三百萬圓ノ巨額ニ達シ更ニ損害ヲ其ノ百分ノ三

ト見積レハ百七十餘萬石ノ減損トナリ一石二十五圓トスレハ四千二百五十萬圓、一石三十圓トスレハ五千百萬圓ノ巨額ニ達スルノ理ナリ又以テ稻螟蟲驅除豫防ノ米穀改良增殖上ニ及ホス影響ノ甚大ナルヲ知ルニ足ラン當局者竝當業者ハ常ニ意ヲ玆ニ致シ稻作奬勵上ノ諸施設ト相俟テ之カ驅除豫防ノ普及發達ヲ期セラレンコトヲ望ム

稻二化性螟蟲驅除豫防奬勵指針

目次

第一、二化性螟蟲（附螟蟲卵寄生蜂）

一　發生ノ時期……一

二　形態竝生育狀態……二

一　成蟲……二

二　卵……二

三　幼蟲……二

四　蛹……三

三　被害狀況竝防除ニ關スル一般的注意……三

四　驅除豫防法……六

一　苗代ニ於ケル採卵捕蛾……六

二　點火誘殺……七

三　本田ニ於ケル採卵捕蛾……八

四　第一化期被害莖ノ除去……八
五　第二化期被害莖ノ除去……一〇
六　藁及刈株ノ處置……一二
五　螟蟲卵寄生蜂……一四
一　種類……一四
二　形態……一四
三　年中ノ經過……一四
四　寄生率……一六
五　寄生蜂ノ效力……一六
六　保護器……一六
七　保護ニ關スル注意事項……一七
第二、稻二化性螟蟲驅除豫防奬勵要項……一八
甲　一般ニ關スル事項……一八
乙　驅除豫防ノ方法ニ關スル事項……一八
丙　驅除豫防ノ實施ニ關シ特ニ注意スヘキ事項……二〇
附　二化性螟蟲生育調査累年表……二三

稻二化性螟蟲驅除豫防奬勵指針

第一、二化性螟蟲（附螟蟲卵寄生蜂）

二化性螟蟲ハ全國至ル所ニ發生シテ稻ノ莖部ニ蝕入シ多クノ枯莖又ハ枯穗ヲ生ゼシメ稻作ニ損害ヲ與フルコト最モ大ナルモノナリ

一　發生ノ時期

年二回ノ發生ヲ普通トスルモ東北地方及北海道ノ一部ニ於テハ一年一回ノ發生ニ止マリ臺灣ニ於テハ三四回ノ發生ヲナス、越年セル幼蟲ハ春季ニ至リテ蛹化シ五月下旬乃至七月中旬ニ亘リテ蛾トナリ苗代及本田ニ產卵ス、孵化セル幼蟲ハ直ニ稻莖ニ蝕入シテ枯莖心枯ヲ生セシムノ之ヲ第一回ノ被害トス、此幼蟲ハ稻莖ヲ蝕害シテ次第ニ老熟シ七月下旬乃至八月上中旬ニ至リテ蛹化シ次デ羽化產卵ス、此卵ヨリ出デタル幼蟲ハ第一回ト同シク稻莖中ニ蝕入シテ枯莖、白穗ヲ生ゼシムノ之ヲ第二回ノ被害トス此幼蟲ハ藁及刈株等ニ潛伏シテ越年ス

二　形態竝生育狀態

一、成蟲　體長四分乃至五分前翅ノ開展七分五厘乃至九分雌ハ雄ニ比シ稍々大形ナリ、共ニ靜止スル時ハ其翅ヲ屋根形ニ疊ミ外觀三角形狀ヲ呈ス前翅ハ長方形ニ近ク雌ハ殆ント白色ナルモ雄ハ蕨色ヲ呈ス共ニ其外緣ニ七個ノ小黑點ヲ竝列ス、蛾ノ羽化ハ午後二三時頃ヨリ夕刻ニ多ク、晝間ハ稻葉ノ間若シクハ屋內ノ暗所ニ潛伏シ、黃昏頃ヨリ稻田ニ飛翔シ、多クハ羽化ノ翌日ヨリ產卵ヲ始メ數日ニ亘リテ五六塊ヲ產附ス、一雌ノ產卵粒數ハ二百乃至七百餘粒ニ及ブ（產卵ニ關スル調査參照）產卵ハ黃昏ヨリ夜半ニ至ル間ニ多キモノナリ、斯ク多數ニ產卵スルモノナレバ產卵前ノ蛾ヲ捕殺スルハ極メテ有効ナルモノトス

二、卵　數個乃至三百餘個ノ卵粒魚鱗ノ如ク重疊シテ一塊ヲナシ其表面ハ光輝アル護膜質ヲ以テ覆ハル第一化ノ卵ハ苗代及本田共ニ稻葉ノ表面尖端ヲ距ル一寸許リノ所ニアルモノ多キモ時ニハ葉裏ニ產附セル事アリ第二化ノ者ハ葉鞘若シクハ之ニ接近セル所ニアルヲ常トス產卵當時ハ乳白色ナレ共漸次黃褐色ニ變シ遂ニ暗紫色トナル但寄生蜂ニ犯サレタルモノハ暗黑色ヲ呈ス（被寄生卵變色順序圖參照）

三、幼蟲　早朝ヨリ午前十時頃迄ニ孵化スルモノ多ク孵化當時ハ淡褐色ニシテ胴部各環節ニ疣狀突起ヲ有シ之ニ長毛ヲ生ズ、背面ニ五條ノ褐色縱線アリ十分或長シタルモノハ體長八分ニ達ス、孵化當時

ノ幼蟲ハ殆ンド其莖ノ葉腋間ニ蝕入スルモ時ニハ直ニ他莖ニ移リテ蝕入スルモノアリ此際ハ多ク葉ヨリ葉ニ這ヒ行クモ往々葉尖キヨリ絲ヲ引キテ垂下シ風ニ依リテ他ニ轉ズルコトアリ、而シテ莖ノ枯死乾固スルニ從ヒ轉々他莖ニ移リ漸次分散シ遂ニ多クハ一莖一頭宛トナルモノナリ、幼蟲ハ性強健ニシテ鋭利ナル口器ヲ有シ往々厚キ菰蓆ヲ貫キ或ハ固キ木質中ニ蝕入スルコトアリ殊ニ越年狀態ニアルモノハ極メテ頑强ニシテ乾キタル土中ニテハ一尺ノ深サニ埋沒スルモ猶脫出スルモノアリ又三十日間以上水中ニ浸漬シ或ハ長ク氷中ニ置クモ猶死滅セザルモノアリ

四、蛹　幼蟲老熟スレバ羽化ノ際蛾ノ逸出ニ利便ナル所ヲ選ミ此處ニ薄ク絲ヲ張リテ其中ニ蛹化ス、蛹ハ褐色ニシテ長サ約四分ナリ第一化ノ幼蟲ハ老熟スルニ從ヒ多クハ葉鞘內若クハ莖稈內ニ蛹トナル其位置ハ水面上三寸位以內ニ多ク、又越年セル幼蟲ハ春季暖氣ノ加ハルト共ニ藁ニアルモノハ潛所ヲ出デテ藁ト藁ノ間又ハ葉鞘ノ間ニ入リテ蛹化シ其位置ハ藁ノ切口ヲ距ル三寸位以內ニアルヲ常トス、埋沒又ハ水中ニ浸サレタル株ニアルモノハ此期ニ至リ脫出シテ他ノ露出セル株又ハ散亂セル藁片或ハ生育中ノ麥莖等ニ入リテ其內ニ蛹化ス之ヲ蛹化前ノ移動期ト稱シ此習性ヲ利用シテ種々ノ驅除豫防法ヲ講ズルコトアリ

三　被害狀況竝防除ニ關スル一般的注意

二化性螟蟲ノ蛾ハ春季稻苗ノ發芽頃ヨリ羽化產卵ヲ始メ孵化シタル幼蟲ハ直ニ葉腋ノ間ニ入リ蝕害スルモノナレバ幼弱ナル苗ハ間モナク枯死スルニ至リ又枯死ニ至ラザルモ葉鞘ノ變色、乾固ニ傾クニ從ヒ漸次他ノ健苗ニ移轉蝕入スルモノニシテ一卵塊ヨリ孵化セル幼蟲モ時ニ數十本ニ亘リ加害スルヲ見ル苗ノ數寸ニ伸長シタル頃ヨリハ漸次產卵數ヲ增加シ移植前後ニ於テ最モ盛ナルハ各地概ネ其軌ヲ一ニセルモノノ如シ、移植前苗ノ繁茂强盛ナル際ハ外觀上被害著シカラザルタメ往々被害苗ヲ移植スル虞アレハ移植ニ際シ注意ヲ要ス、尙特ニ緣苗ニハ多ク蝕入セルモノナレバ移植ノ際緣苗ヲ殘シテ採苗スル風習ハ螟蟲驅除ニ對シ大ニ効アルモノトス、本田移植後ニ於ケル被害ハ苗代ニ於テ旣ニ產卵蝕入シタル所謂被害苗ヲ移植シタルモノ竝ニ移植當時ニ產卵孵化セルモノハ植痛ミト共ニ被害部ヨリ折レテ垂下シ多クハ水面ニ倒レ浮ブ之ヲ流レ葉ト稱シ移植後風雨ノ强キモノアル時ハ著シク此現象ヲ呈ス

移植法其當ヲ得ズ深植ニ過ギタルモノハ此際多クノ株絕ヘヲ生シ被害特ニ著シキモノナリ斯カル被害ハ第一化期ノ發蛾遲延シタル年柄ニ多ク特ニ早植地ニ著シキモノナレバ其年ノ發蛾狀況ヲ考察シ本田ノ捕蛾採卵ヲ勵行スルハ勿論臨機ノ手段方法ヲ講スルコト最モ肝要ナリトス、螟蟲被害ニ依ル流レ葉多數ナルトキハ驅除ノ一法トシテ之ヲ摘採スルコトアリ稻ノ活着後ニ產卵孵化セルモノハ流レ葉ヲ生スル事少ク其株ノ枯死乾固スルニ從ヒ隣莖ニ移轉蝕入シテ一部ニ多數ノ枯莖ヲ生ズ、斯クシテ漸次成長スルニ從ヒ被害莖ヲ辭シテ他ノ健全ナル稻莖ニ移リ初メハ葉鞘ニ蝕入スルヲ常トスルモ次第ニ莖部

ニ蝕入スルニ至リ玆ニ所謂心枯ヲ生セシムル之レ稻ノ分蘗期ニ起ル現象ニシテ此期ニ於ケル幼蟲ハ既ニ枯死乾固ニ傾キタル莖中ニアルモノ極メテ少ク僅ニ心葉又ハ一部葉鞘ノ變色若シクハ萎凋シタルモノニ多ク存在スルヲ見ル(第一化期被害莖中ノ存在蟲數調査參照)此狀態ハ稻ノ繁茂程度及害蟲ノ發育狀態ニ依リ多少異ナルモ少シク熟練スル時ハ容易ニ幼蟲ノ存否ヲ鑑別シ得ベク此鑑別ハ第一回被害莖切取驅除上最モ重要ナル事項ナリトス、此幼蟲ハ大抵七月下旬乃至八月上旬ニ至レバ漸次老熟蛹化ヲ始ムルモノニシテ玆ニ被害ハ一時輕減又ハ停止スルモノナリ古來稻蟲ハ夏季土用ニ至レバ其影ヲ沒スト稱シタルハ此狀態ヲ指示スルモノニシテ約半月又ハ三週間ヲ經テ八月中下旬ニ至レバ再ビ被害莖ノ現出ヲ見ル之レ卽チ第二回ノ發生ニシテ此期ニ於ケル稻ハ朶穗又ハ出穗期ニ際シ孵化セル幼蟲ハ殆ンド全部其莖ノ葉腋内ニ群集シテ蝕入シ葉鞘ノ内面ヨリ喰害ス從テ外部ヨリ之ヲ見ル時ハ初メ其部分ニ淡綠若シクハ淡灰色ナル縱ニ**カスリ狀**ノ變色現レ次デ黃色又ハ褐色ニ變シ其葉ハ萎凋シ或ハ褐色トナルヲ之ヲ**葉鞘變色莖**ト稱シ蝕入後十日内外ニシテ全莖枯死スルニ至ル、此枯死狀態ハ孕穗期ニアリテハ所謂出**スクミ**トナリテ穗ヲ抽出スルコトナク、出穗期ノ者ハ白穗トナリテ全ク登熟セザルモノナリ、此一莖中多數ニ蝕入セル幼蟲ハ其莖ノ枯死乾固ト共ニ漸次分散シテ他莖ニ蝕入スルモノナレバ**被害莖ノ切取リハ此分散前ニ施行**スルコト最モ肝要ナリトス、分散移轉セル幼蟲ハ再ヒ葉腋ヨリ蝕入シ最初ノ一莖程急劇ナラザルモ自然ニ其生育ヲ妨ケラレ又種々ノ病害ニ犯サレ易ク比較的外部ニ現レザル大害

ヲ醸スモノナリ、秋季田面ノ所々ニ半坪乃至一坪許リノ出スクミヲ生ジ或ハ多クノ枯莖白穗ヲ現出シ若シクハ稻莖ノ倒伏ヲ見ルハ多ク此第二化期發生螟蟲ノ被害ニシテ斯カル場合ハ啻ニ收量ヲ減スルノミナラズ米質ヲ損スルコト甚シク不測ノ損害ヲ蒙ルモノナリ、殊ニ第一化期ノ被害ハ其後ノ分蘖ニ依リ幾分ノ挽回ヲ見ルモ、第二化期ニ至リテハ假令一頭一莖ノ被害ト雖モ決シテ恢復ノ見込ミナキモノナレバ此期ノ驅除ハ特ニ周到ヲ要スベキモノトス

四　驅除豫防法

一、苗代ニ於ケル採卵捕蛾

發蛾產卵ノ狀況ヲ考察シ捕蛾採卵ヲ施行スベシ、實施ニ際シ注意スベキ事項左ノ如シ

イ、採卵時刻　晴穩ナル日ノ早朝又ハ夕刻ヲ可トシ、日中ハ卵塊ノ發見稍々困難ナルモノナリ

ロ、採卵回數　發蛾期間ノ長短ニ依リ一定シ難キモ一化期ヲ通シテ三回乃至五回ヲ標準トシ、毎回ノ間隔ハ其當時ノ卵期ニ依リ異ナルモ普通三日乃至七日ヲ適當ト認ム

ハ、產卵場所　葉尖ヨリ一寸許リノ表面ニアルヲ普通トスルモ苗ノ繁茂盛ナル時ハ下葉又ハ葉裏ニ產附セルモノアリテ發見容易ナラザル場合アリ充分ノ注意熟練ヲ要スルモノトス

二、寄生蜂保護

摘採セル卵塊ニ對シテハ必ズ卵寄生蜂ノ保護ヲ計ルベシ（後章卵寄生蜂ノ項參

照）

蛾ハ晝間苗ノ間ニ潜伏セルモノ多キモノナレバ採卵ノ際ハ勿論適宜之ヲ捕殺スベシ

二、點火誘殺

夜間誘蛾燈ヲ點火シテ蛾ヲ誘殺スベシ

誘蛾燈ニ集來スル螟蛾ハ比轉的產卵前ノモノ多ク（燈火ニ集來セル螟蛾ノ產卵調査參照）之レガ點火ハ最モ有効ナル方法ナルモ土地ニ依リ誘殺蛾數極メテ少ク經濟上不利ナル場合アリ特ニ第一化期發生ノ移植後ニ於ケルモノ竝ニ第二化期發生ニ於テ其傾向著シキモノアリ又單獨或ハ部分的ノ點火ハ時ニ蛾ヲ誘集シテ一部ニ產卵ヲ多カラシムル等ノコトアレバ豫メ土地ノ狀況ヲ考察シ取捨其宜シキヲ得ルヽ共ニ實施ニ際シテハ左記ノ事項ヲ參照スベシ

イ、點火燈數　發蛾狀況ニ依リ增減スベキハ勿論ナルモ苗代ニアリテハ一反歩二三個本田ニアリテハ一反歩一二個ヲ普通トス

ロ、點火位置　苗代ニアリテハ周圍畦畔外ニ設置シ苗ノ葉尖ヨリ五寸乃至一尺位ノ高サニ、本田ニアリテハ燈光ノ透通良キ場所ヲ見計ヒ葉尖ヨリ一二尺ノ高サニ點火スルヲ適當ト認ム

ハ、點火時間　黃昏ヨリ十二時頃迄ヲ普通トスルモ天候氣溫ノ關係ニ依リ夜半以後ニ於テモ猶蛾ノ飛翔スルモノ多キコトアレバ終夜點火ヲ要スル場合アリ

苗代ニ於ケル捕蛾採卵竝ニ點火誘殺ハ螟蟲驅除上有効ナルモノナルモ一地方共同シテ之ヲ行フニアラザレバ十分ノ効ヲ收メ難シ、苗代ハ短冊形ニナスト共ニ人家及藁ノ堆積場ヨリ隔離セル所ニ設クルヲ可トス

三、本田ニ於ケル採卵捕蛾

第一化期ノ發蛾ハ極メテ不規則ニシテ本田移植後ニ於テモ猶多少ノ產卵ヲ見ルモノナルガ發蛾ノ遲延シタル年柄及早植ノ場合ニ殊ニ多シ第一化期ノ被害ハ發生期ノ遲延スルニ從ヒ孵化蟲數ニ對スル被害率增大スルモノナレバ往々不慮ノ大害ヲ及ボスコトアルヲ以テ宜シク地方ニ於ケル發蛾狀況ニ鑑ミ適宜捕蛾採卵ヲ施行スベキナリ、實施上ノ注意ハ苗代ニ於ケル事項ノ外左記ヲ參照スベシ

イ、本田ニ於ケル採卵ハ面積ノ擴大セルヨリ大ニ困難ナル如ク考ヘラルモ苗代ニ比シ檢出シ易ク比較的容易ニ施行シ得ヘシ但移植當初ノ採卵ハ必ズ早朝ニ行フヲ可トス時刻遷延スルトキハ稻葉捲縮シテ發見困難ナリトス

ロ、卵寄生蜂ノ寄生率ハ晩期ニ至ルニ從ヒ增加スルヲ常トスルモ移植當時一時非常ニ其率ヲ低下スルモノナレバ此當時ノ採卵ハ最モ有効ナルモノナリ

四、第一化期被害莖ノ除去

前記ノ如ク採卵捕蛾ヲ行フト雖モ猶幾分ノ產卵孵化スルモノアリ七月頃被害莖ヲ生スルモノナレバ

適當ノ時期ヲ見計ヒ根際ヨリ切リ去ルベシ特ニ早稻栽培地ニ於テハ本法ヲ怠ルベカラズ

此法ハ第一回ノ被害ヲ輕減スルト共ニ併セテ第二回ノ發生ヲ豫防スルニ効アルモ、幼蟲ノ移轉迅速ナル時期ニ於テ施行スルモノナレバ其方法ノ如何ニ依リ折角ノ除去モ効果極メテ薄弱ニ終ルコトアリ、實施ノ際注意スベキ要點ヲ左ニ列記スベシ

イ、切取時期　移植後二十日目頃ヨリ五十日目頃迄ヲ適期ト認ム其以前ニアリテハ流レ葉、植痛ミ等種々ノ紛ラハシキ傷害多クシテ螟蟲被害ヲ確認シ難ク又其以後ニアリテハ被害莖ノ檢出容易ナルモ其内ニ生存セルモノノ認定稍々困難ナルモノナリ

ロ、被害莖ノ檢出　害蟲ノ發育程度竝ニ稻ノ生育狀況ニ依リ異ナルモ、葉及葉鞘ノ一部變色シ或ハ一二葉ノ萎凋シタルモノハ其内ニ生存セル歩合極メテ多キモノナレバ努メテ除去スベシ葉莖甚シク變色シ枯死ニ傾キタルモノハ除去シテ妨ゲナキモ蟲ノ生存スルモノ少ク驅除ノ効果薄弱ナルモノトス但蛹ハ往々枯莖ニ存在スルコトアリ（第一回被害莖中ノ蟲數調査參照）

ハ、切取莖ノ處分　少量ナル時ハ直ニ泥土中三寸以上ノ深サニ埋沒シ多量ナルトキハ幼蟲ノ脫出セザル樣一ケ所ニ集メテ熱湯ニ一分間以上浸漬シ又ハ燃料ヲ加ヘテ燻殺スベシ

ニ、流レ葉の摘採　苗代ニテ蝕入セルモノ及移植當時ニ產卵孵化多キ場合ハ多數ノ流レ葉ヲ生スルモノナレバ凡ソ一晝夜間出來得ル限リ田水ヲ深クシ置キ、之ヲ摘採シ集メテ埋沒其他殺蟲處分ヲ

ナスベシ

五、第二化期被害莖ノ除去

第二化期ノ幼蟲ハ孵化當時多數群ヲナシテ莖中ニ蝕入セルモノナレバ其發生期ニ際シ幼蟲ノ他莖ニ移轉セザル前須ク之ヲ除去スベシ

本法ノ施行ハ共同又ハ單獨ノ別ナク直接ノ利得的確實ニシテ現行驅除法中効果ノ最モ顯著ナルモノナリ實施上注意スベキ要點左ニ列記スベシ

イ、切取時期　發蛾狀況並ニ稻ノ品種及其發育狀態ニ依リ多少酌量ヲ要スベキモ普通其地方ノ豫察燈ニ依ル第二化發蛾初期ヨリ二十日乃至三十日目頃ニ始ムルモノヲ適當ト認ム（發蛾初期トハ一二頭切々ニ發生セルモノハ之ヲ除キ少クモ三日以上連續シテ誘殺セル其初日ヲ云フ）宜シク地方別ニ確實ナル豫察燈ヲ點火シテ發蛾狀況ヲ考察スルハ勿論常ニ稻ノ發育ト螟蟲被害ノ狀態ヲ鑑察シ其年其都度之ヲ定ムルヲ可トス、特ニ二化期ノ發生ハ早キモノ程被害率高キモノナレバ初期ニ於テハ少數タリトモ決シテ忽諸ニ附セス、切取期日ノ選定ハ事情ノ許ス限リ早キヲ得策トス

ロ、切取回數　發生程度竝ニ發蛾期間ニ依リ增減スヘキハ勿論ナルモ、普通二回ヲ標準トシ毎回ノ間隔ハ十日間ヲ適當ト認ム

ハ、被害莖ノ檢出　孕穗前最モ早ク蝕入セルモノハ葉鞘ニ明瞭ナル變色ヲ現サズ、葉ハ萎凋シ數日

ニシテ**全莖青枯**レトナルモノアリ、**孕穗期**ニ蝕入セルモノハ初メ其一側葉鞘ニ淡ク縦ニ**絣狀**ヲ現シ次テ此部分黄褐色ニ變ジ其葉ハ萎凋黄變シ遂ニ全莖出**スクミ**トナリテ枯死ス出穗期ニ蝕入セルモノハ直ニ白穗トナリテ現出スルモノ多キモ比較的下部ニ蝕入セルモノハ容易ニ白穗ヲ現サズシテ先ヅ前記孕穗期ニ於ケル如キ現象ヲ呈ス乳熟期ニ蝕入セルモノハ穗ノ變色スルコト少ク又葉鞘ノ變色明瞭ナラサル場合アルモ多クハ蝕入部ノ葉萎凋變色シ穗ハ他ノ健全ナルモノニ比シ稍枯色ヲ呈スルモノトス（第二化被害莖變色順序圖參照）之ヲ要スルニ被害莖ノ認定ハ**葉鞘ノ絣狀又ハ縦縞狀ノ變色**ヲ以テ最モ確實ナルモノトスルモ此期ニ於ケル稻ハ繁茂ノ眞盛リニシテ初メヨリ之ヲ確認スルコト稍々困難ナレバ稻ノ發育程度ニ依リ前記被害狀況ニ鑑ミ葉ノ萎凋又ハ黄變穗ノ變色等蝕入ニ依リ起ル副現象ニ付キテ研究シ、被害莖確認ノ階梯ヲ作リテ之ガ檢出ニ利用スルコト作業上最モ肝要ナリトス

ニ、切取方法　莖切鎌ヲ以テ被害莖ノ最下部ヨリ切取ルヲ可トシ、單ニ莖ノ上部ノミヲ拔取ル如キハ多數ノ幼蟲ハ下部ニ殘存シテ再ビ他莖ニ蝕入スルモノナリ、又此際他ノ健稻ヲ損傷セザル樣充分ナル注意ヲ要ス

ホ、切取莖ノ處分　幼蟲ノ脫出極メテ迅速ナル時期ナレバ、切取莖ヨリ幼蟲ノ脫出防止ヲ第一ノ要件トス卽チ切取莖ノ一握リトナリタル時ハ田水又ハ附近水溜ノ中ニ其切口ヲ浸シテ直立セシメ置

キ、一田ヲ終ル毎ニ之ヲ集メテ殺蟲處分ヲナスベシ、殺蟲處分トシテハ熱湯ニ一分間以上浸漬シ或ハ燃料ヲ加ヘテ燻殺スルヲ可トシ、又堆肥中深ク踏ミ込ミ或ハ附近ニ廣キ川原等ノアル地方ニテハ茲ニ薄ク擴ゲテ炎天ニ乾燥スルモ一法ナリ但此場合ハ稻田及芝生ヨリ少クモ五間以上離レタル處ニ限ルヲ安全トス

六、藁及刈株ノ處置

春季蛾ノ發生前ニ方リ藁ヲ屋内ニ密閉シ、戸外ニ堆積セルモノハ莚等ヲ以テ被覆シ蛾ノ逸出ヲ防ギ其他藁ノ堆積場附近ニ適宜誘蛾燈ヲ點火シテ蛾ヲ誘殺スルモ一法ナリ又株中ニテ越冬スルモノ多數ナル地方ニテハ株處分ヲナスコトアリ

本法ハ農業組織竝ニ慣習等ヲ利用スルニアラザレバ徒ニ經費勞力多大ニ上ルノミナラズ、豫メ其地方ニ於ケル越冬狀態ヲ精細ニ調査シ、ナルベク廣面積ニ亘リ地形上他ト絶緣セル土地ヲ區劃シ共同シテ綿密ニ施行スルニアラザレバ其効果充分ナラザルモノトス、實施ニ際シ注意スベキ事項左ノ如シ

イ、藁ノ密閉　室内ニ密閉スル時ハ室ノ一方ニ明リ窓ヲ設ケ之ニ金網又ハ寒冷紗ヲ張リテ蛾ノ逸出ヲ防グ裝置ヲナスベシ全室暗黑ナル時ハ化蛹前外部ニ脫出スルノ恐レアリ、野外ニ堆積セルモノヲ被覆スル場合ハ積藁ト覆ヒトノ間ニ多少ノ空間ヲ要ス若シ之ヲ密接シテ緊縛スルトキハ幼蟲

ハ化蛹前被覆物ヲ貫キテ蛹化シ羽化脱出スルコト多キモノナリ密閉期間ハ發蛾狀況ニ依リ異ナルモ四月ヨリ七月迄ノ間ニ於テ約三ケ月間ヲ普通トス

ロ、藁積ノ掻拂　越冬幼蟲ノ移動期ニ積藁ノ外部ヲ藁スグリ様ノ掻拂器ニテ掻拂ヒ其ノ内ニ潜伏セル莖蟲、蛹、蛾等ヲ捕殺スル方法ナリ實施容易ニシテ地方ニ依リテハ大ニ有効ナル場合アルモ可成廣キ地域ニ亘リ之ガ實行ヲ計ルニアラザレバ其ノ効果尠キヲ以テコノ點ニ付テハ充分注意スルヲ要ス尚掻拂ノ時期及程度ハ地方ノ狀況ニ依リ一概ニ述ブルコトヲ得ストハ雖大體ニ於テ五月頃七日以内間隔ヲ置キテ三回以上實施スルヲ普通トス

ハ、刈株ノ處分　全部掘取リ燒棄スルヲ最良ノ方法トナスモ多額ノ經費勞力ヲ要スルモノナレバ實施困難ナリ但化蛹期ニ臨ミ露出株ノ拾ヒ取リヲ行フハ土地ノ狀況ニ依リ大ニ有効ナル場合アリ又一毛作地ニアリテハ刈取後成ルベク早ク株ヲ掘返シ俯向セシムル時ハ大多數ノ幼蟲ヲ死滅セシムルコトヲ得

ニ、藁及刈株以外ノ處置　幼蟲ハ藁及刈株以外、粟　黍及玉蜀黍等ノ莖稈又ハ菰蒲等種々ノ植物中ニ潜伏越年シ時ニ意外ノ場所ニ多數ノ潜伏蟲ヲ見ルコトアリ特ニ刈取ノ際脱出蟲多キ場所ニ此事多シ之等ハ藁株處理ノ際最モ考慮ヲ要スベキ點ナリトス

五　螟蟲卵寄生蜂

一、種類　螟蟲卵ノ寄生蜂ニハ數種アルモ普通ナルハ赤卵蜂ト黑卵蜂ノ二種ニシテ就中赤卵蜂ハ**分布全國ニ亘リ寄生率最モ高キモノナリ**

二、形態　赤卵蜂ハ體長僅ニ二厘内外ノ微小ナル蜂ニシテ一見淡黑色ヲ呈スルモ複眼ハ赤色ニシテ肢ハ黃褐色ナリ雌ノ觸角ハ其末節棍棒狀ニ膨大セルモ雄ノ觸角ハ細長ニシテ長毛ヲ叢生ス黑卵蜂ハ前種ニ比シ僅ニ大キク雌ハ全身漆黑色ヲ呈シ雄ハ觸角頭胸部及肢ニ黃褐色部アリ觸角ハ珠數狀ヲナシ雌ハ十一節ナルモ雄ハ十二節ヨリナル

三、年中ノ經過　赤卵蜂ハ年十五六回ノ發生ヲナシ越年セルモノハ四月下旬ヨリ羽化ヲ始メ螟蛾科ニ屬スル小蛾ノ卵塊ニ寄生シテ一二代ヲ經過シ螟蟲ノ產卵ヲ始ムルト共ニ苗代ニ來リテ螟卵ニ寄生ス植物檢查所四月市支所ニ於テ試育セル年中ノ經過左ノ如シ

赤卵蜂ノ經過

世代	產卵月日	羽化月日	產卵ヨリ羽化マデノ日數	考
一	四月三〇	四月二九、一六	一七	越年セルモノ寄主螟卵以外

二	五、一六	五、三〇	一四	同	同
三	五、三〇	六、九	一〇	同	螟卵
四	六、九	六、二〇	一一	同	同
五	六、二〇	六、二九	九	同	同
六	六、二九	七、八	九	同	同
七	七、八	七、一六	八	同	同
八	七、一六	七、二三	七	同	同
九	七、二三	七、三〇	七	同	螟卵以外
一〇	七、三一	八、七	八	同	同
一一	八、七	八、一四	七	同	螟卵
一二	八、一四	八、二一	七	同	同
一三	八、二一	八、二八	七	同	同
一四	八、三〇	九、七	一〇	同	同　（一部越年）
一五	九、七	九、一七	一〇	同	螟卵以外（一部越年）
一六	九、一八			同	同　（全部越年）

備考　一、越年セルモノハ四月二十七日ヨリ羽化ヲ始メタルモ寄主ヲ得ズ三十日ニ至リ始メテ得タリ

二、第十代及第十四代ノ羽化當日産卵シ得ザリシハ寄主ヲ得ザリシニヨル

黒卵蜂ハ未ダ年中ノ經過ヲ詳ニセザルモ赤卵蜂ニ比シ一世代ノ期間稍々長ク宿主ノ範圍又狹小ナルモノノ如シ試育セル經過ノ一部左ノ如シ

世代	産卵月日	羽化月日	産卵ヨリ羽化迄ノ日數
一	六、月二	六、一八	一七
二	六、一八	七、二	一五
三	七、二	七、一五	一四

四、寄生率　螟蟲發生ノ初期ヨリ晩期ニ至ルニ從ヒ漸次寄生率ヲ增大スルモノニシテ年ト土地ニ依リ大ニ其率ヲ異ニスルモ四日市地方ニテハ六月上旬ハ三%前後ナルモ中旬ニハ三十%ニ上リ下旬ヨリ七月ニ亘リテハ八十%(全部赤卵蜂)ニ達スルヲ常トス

五、寄生蜂ノ効力　寄生蜂ハ前記ノ如ク經過極メテ早ク螟蟲一化ノ發蛾期間ニ四五代ヲ經過シ一雌ノ産卵五十粒以上ニ及ブモノナレバ其繁殖實ニ迅速ニシテ、試驗器內ノ調査ニ依レバ螟蟲初期ノ産卵當時一双ノ赤卵蜂ヲ完全ニ保護シテ其後漸次新鮮ナル螟卵ヲ與ヘテ寄生繁殖ニ任セタルニ、螟蟲一化期間ノ終リ迄ニ螟卵一千粒以上ノ孵化ヲ防止シ、無寄生區ニ比シ玄米約三合ヲ增收シタル事實アリ、自然界ニ於ケル効力ハ固ヨリ之ヲ確認シ難キモ之ガ保護ハ自然驅除上最モ有効ナルモノナリ

六、保護器　其構造種々アルモ要ハ孵化セル螟蟲ノ逸失ヲ防ギ寄生蜂ヲ安全ニ放出セシムルニ止マルモノナレバ土地ノ狀況ニ依リ適宜考案スルヲ可トス　第二圖參照

七、保護ニ關スル注意事項

一、寄生蜂ノ飛翔力ハ案外強ク十間以上ニ及ブハ試驗ノ證スル所ナルモ保護器ハナルベク圃場附近ニ設置スベシ

一、保護器ノ設置ハ土地ノ狀況ニ依リ增減スベキハ勿論ナルモ苗代ニアリテハ一反歩三個本田ニアリテハ一反歩一個ヲ標準トス

一、保護器ニ投入セル螟卵附着ノ稻葉ハ徽ビ易キモノナレバナルベク之ヲ防止スル手段ヲ講ズベシ

一、保護器ニ日光ノ直射ヲ受クル時ハ器內ノ溫度著シク上昇シ或ハ內面ニ水濕ヲ來スコトアリテ寄生蜂ノ發育竝逸出ヲ阻害スルコトアレバ、ナルヘク直射ヲ避クベシ

一、保護器ニ使用スル油ハ往々保護器內ニ浸透シテ寄生蜂ヲ死滅セシムルコトアレバ、之ガ取扱上常ニ注意ヲ要ス

一、孵化セル螟蟲ハ往々絲ヲ引キテ器內ニ脫出スルコトアリ、一時ニ多量ノ卵塊ニ投入シタル場合特ニ此事多キモノナレバ注意スベシ

一、投入シタル卵塊ハ螟蟲ノ全部孵化シタル後速ニ器外ニ取出スヲ可トス但此卵塊中ニハ猶多數ノ寄生蜂アルモノナレバ水中ニ散亂セザル樣畦畔其他適宜ノ場所ニ安定シ置クベシ

第二　稻二化性螟蟲驅除豫防奬勵要項

甲、一般ニ關スル事項

一、螟蟲ノ羽化期間　毎年一郡市一箇所ヲ大體ノ標準トシテ適當ノ場所ニ豫察燈ヲ點火シ之カ發生ノ時期及程度ヲ調査シ驅除豫防ノ適期及奬勵ノ方針ヲ決定スルコト

二、螟蟲ノ驅除豫法ハ農家ノ自覺ニ待ツコト大ナルヲ以テ適當ノ時期ニ於テ講習講話ヲ開催スベキハ勿論特ニ實地指導ニ重キヲ置キ充分農家智識ノ開發ヲ圖ルコト

三、螟蟲ノ驅除豫防ハ努メテ指導奬勵ニ依リ農家ヲシテ自發的ニ實行セシムルヲ適當原則トスル命令ヲ以テ驅除豫防ヲ強制スルヲ必要トスル場合ニハ驅除豫防ノ方法及之ガ實行ノ方針ハ地方ノ事情ニ應シ極メテ適切ナルベキハ勿論命令ノ發布若ハ改廢ニ際シテハ技術上經濟上及社會上等ノ諸方面ヨリ愼重ナル考慮ヲ拂ヒ苟モ命令濫用ノ幣ヲ生ズルカコトナキ樣注意スルコト

四、命令ヲ以テ驅除豫防ヲ一齊ニ實行セシムル場合ニハ豫メ道府縣ニ於テハ驅除豫防ノ期間及回數等ヲ公示シ郡又ハ市町村ニ於テハ地方ノ情況ニ鑑ミ適切ナル實施日割ヲ定メ之ヲ周知セシムル等周到ナル注意ヲ拂ヒ驅除豫防上遺憾ナキヲ期スルコト

實施日割ノ通知後發生ノ情況ニ著シキ變化ヲ來シタル場合ニハ速ニ日割ヲ變更シ驅除豫防ノ效果ヲ

確實ナラシムルコト

五、驅除豫防委員ハ驅除豫防實施期間絶ヘズ巡回ヲナシ懇切ニ指導奬勵ヲ爲スコト

六、小學兒童ヲシテ捕蛾採卵ヲ行ハシムル場合ニハ左記事項ニ注意スルコト

（イ）螟蟲ノ經過習性竝驅除豫防ノ必要及其ノ方法ニ就キ豫メ實地ニ敎示スルコト

（ロ）農作物ヲ損傷セサル樣注意スルコト

（ハ）適當ナル學級ノ兒童ヲシテ行ハシムルコト

（ニ）捕蛾採卵等ニ對シ奬勵金ヲ交付スル場合ニハ之ヲ一括シテ學校ニ交付シ學用品ノ授與等ノ方法ニ依リ可成現金ノ交付ヲ避クルコト

乙、驅除豫防ノ方法ニ關スル事項

驅除豫防ノ方法ハ地方ノ事情ニ依リ一概ニ之ヲ述ブルコトヲ得ザルモ大體ニ於テ特ニ注意ヲ要スト認ムル事項左ノ如シ

一、第一回羽化期ニ於ケル採卵及捕蛾

二、螟蟲卵寄生蜂ノ保護

三、二化性螟蟲ニ對シテハ第二化期被害莖（葉鞘變色莖）ノ除去

四、三化性螟蟲ニ對シテハ第三化期ニ於ケル採卵

尙螟蟲ノ發生狀況、農作物栽培狀況、病蟲害ニ關スル農家ノ知識其ノ他地方ノ經濟事情等ヲ參酌シ適宜奬勵スルヲ適當ト認ムル事項左ノ如シ

一、點火誘殺

二、藁積掻拂及藁ノ密閉（東北北陸其ノ他氣候ノ比較的寒冷ナル地方ニ於テ特ニ注意ヲ要ス）

三、刈株ノ處分（二代性螟蟲ニ付テ特ニ注意ヲ要ス）

四、移植期ノ變更

丙、驅除豫防ノ實施ニ關シ特ニ注意スヘキ事項

一、採卵及捕蛾

（イ）捕蛾採卵ノ實行ヲ督勵スルニ當リテハ螟蛾ノ發生狀況並稻以外ノ農作物ノ種類及之レニ對スル勞力需給其他地方ノ事情ヲ考慮シ之ガ實行程度及時期ニ付特ニ注意スルコト

（ロ）螟蟲卵寄生蜂ノ保護ハ螟蟲ノ驅除豫防上頗ル重要ナル方法ナルヲ以テ採集シタル螟卵ニ對シテハ必ズ螟蟲卵寄生蜂ノ保護ヲ計ルコト

二、螟蟲卵寄生蜂ノ保護

（イ）螟蟲卵寄生蜂ノ保護ハ當業者各自ニ行フヲ適當トスルモ若シ直ニ各自ニ行フコト能ハザル場合ハ小字ニ數ケ所宛設備シ漸次普及セシムルコト

（ロ）市町村ニ於テハ交通頻繁ナル道路ノ附近ニ保護器ヲ設置シ卵寄生蜂ノ性狀保護ノ必要ナル所以、保護上注意スベキ事項等ヲ說明シタル建札ヲナシ卵寄生蜂保護ノ模範ヲ示シ普及ヲ圖ルコト

（ハ）農事試驗場、農業學校、農業補習學校等ノ圃場及縣郡町村ノ採種田等ニハ必ズ保護器ヲ設置シ實物敎示ヲ爲スコト

（ニ）螟蟲卵寄生蜂ノ發生期間ニ於テ當業者ヲ適當ノ場所ニ集合セシメ實地ニ付說明ヲナシ之ガ保護ノ必要ナルコトヲ自覺セシムルコト

（ホ）螟蟲卵寄生蜂ノ保護器ハ可成廉價ニシテ且地方ニ於テ得ラレ易キモノヲ使用セシムルコト

三、第二化期被害莖（葉鞘變色莖ニ）ノ除去

（イ）葉鞘變色莖ノ除去ヲ實行スルニ當リテハ螟蟲被害ノ多少及地方ノ事情ニ鑑ミ之カ實行ノ程度及時期ニ特ニ注意スルコト

（ロ）葉鞘變色莖ノ除去ハ農家ヲシテ充分其ノ效果及方法ヲ了得セシムルニアラザレバ之ガ普及ヲ圖ルコト困難ナルヲ以テ適當ノ場所及時期ニ於テ特ニ周到ナル實地指導ヲ行ヒ之ガ必要ヲ自覺セシムルコト

（ハ）除去シタル被害莖ハ一定ノ場所ニ持寄ラシメ煮沸燒棄其ノ他適當ノ方法ニヨリ完全ナル殺蟲處分ヲ行フコト

四、點火誘殺

（イ）點火誘殺ハ可成適當ナル區域全部ニ亘リ共同的ニ行ハルル場合ニ於テノミ之ヲ實行スルコト

（ロ）點火誘殺ハ點火ノ管理其ノ宜シキヲ得サレバ效果尠キヲ以テ之ヲ實行スルニ當リテハ特ニ此點ニ注意スルコト

五　藁積掻拂及藁ノ密閉

（イ）東北、北陸其ノ他氣候ノ比較的寒冷ナル地方ニ於テハ效果多キガ如キ以テ該地方ニアリテハ之ガ指導奬勵ニ關シ特ニ注意スルコト

（ロ）地方ノ狀況ニ依リ實地指導ヲ行ヒ之ガ實行上遺憾ナキヲ期スルコト

（ハ）採集シタル幼蟲、蛹及成蟲ハ一定ノ場所ニ持寄ラシメ適當ノ方法ヲ以テ殺蟲處分ヲ行フコト

二、化性、螟蟲生育調査、累年表（自大正五年至大正九年五箇年）

一、本調査ハ毎年百頭宛ニ付施行セルモノナリ

一、本表ハ室内一定ノ場所ニ於ケル成績ナレバ實地野外ニ於ケル發蛾、産卵、孵化、化蛹期間ハ最初最後共ニ五日乃至十日延長スルヲ常トス

蛹期調査

年度	最長	最短	總平均	雌ノミノ平均	雄ノミノ平均	栽年蟲ニ對スル蛹化歩合	栽年蟲ニ對スル羽化歩合	羽化蟲ノ雌雄歩合 雌	羽化蟲ノ雌雄歩合 雄	蛹化最初	同上最後
大正五年	一九日	八日	一二、〇日	一一、一日	一二、九日	—	—	五五	四五	五、二〇月	七、七月
同六年	一八	六	一二、六	一一、一	一三、九	四五	四〇	四五	五五	五、二三	七、一〇
同七年	二一	一一	一五、五	一五、一	一五、六	七九	六八	四二	五八	五、一一	六、二四
同八年	二三	一〇	一五、七	一五、六	一六、二	五四	五〇	五四	四六	五、九	六、二一
同九年	一六	九	一二、四	一二、〇	一三、〇	六九	六七	五五	四五	五、一五	六、二八
平均	一九、四	九	一四、〇	一三、〇	一四、三	六一八	五六三	五〇二	四九八	五、一六	六、三〇

成蟲ノ壽命

年度	羽化ヨリ産卵迄ノ日數			一雌ノ産卵期間			一雌ノ産卵數			一雌ノ産卵粒數		
	最長	最短	總平均	最長	最短	總平均	最多	最少	總平均	最多	最少	總平均
大正五年	七日	二日	二、六	九日	一日	五、一	一四	一	四、六	五五九	一一	二七九
同六年	四	二	二、八	一六	一	七、九	一八	一	八、二	七八〇	七七	三七〇
同七年	七	二	二、七	八	一	五、二	一八	一	五、五	五一五	三七	二一四
同八年	五	二	二、五	七	一	三、九	一一	一	四、三	七四八	四八	二三八
同九年	五	二	二、二	一三	一	五、二	一二	一	六、〇	六二八	三七	二九二
平均	五、六	二	二、六	一一	一	五、五	一五	一	五、七	六四六	四二	二七九

産卵ニ關スル調査

年度	最長	最短	總平均	雌ノミノ平均	雄ノミノ平均	羽化最初	同上最後
大正五年	一一日	三日	六、八日	七、〇日	六、四日	六、月 六	七、月 五
大正六年	二四	三	一〇、四	一〇、一	一〇、七	六、五	七、八
大正七年	二四	三	九、八	九、六	一〇、一	六、三	七、一
大正八年	一二	二	六、七	六、六	六、八	五、二八	六、三〇
大正九年	一四	二	七、四	七、三	七、四	五、三〇	七、四
平均	一八	三	八、二	八、一	八、三	六、三	七、四

卵期

年度	最長	最短	總平均	一卵塊ノ卵粒數 最多	最少	總平均	孵化歩合	産卵最初	同上最後
大正五年	九日	六日	七、〇日	—	—	—	—	六、九月	七、七月
同六年	一四	四	七、〇	二五七	三	五九	九七	六、七	七、一二
同七年	一二	五	八、七	一九七	二	三九	九七	六、五	七、五
同八年	一一	五	八、一	二四二	二	五九	九七	五、二九	七、一〇
同九年	一一	五	九、〇	二八〇	二	五一	九八	五、三一	七、八
平均	一一、四	五	八、〇	二四四	二	五二	九七	六、四	七、八

燈火ニ集來セル螟蛾ノ産卵

年度	一雌ノ産卵塊數	一雌ノ産卵粒數	一卵塊ノ卵粒數
大正五年	—	—	—
同六年	六、五	二七九	四三
同七年	三、八	一三〇	三四
同八年	四、四	一八八	四二
同九年	四、一	二一六	五二
平均	四、七	二〇三	四三

幼蟲期

年度	最長	最短	總平均	孵化蟲數ニ對スル老熟歩合	孵化最初	同上最後
大正五年	六七日	三一日	四三、三日	七、五	六、一七月	七、一二月
同六年	五五	二四	三四、六	一一、〇	六、一五	七、一六
同七年	四八	二五	三五、九	五、三	六、一五	七、九
同八年	四六	二六	三六、四	六、六	六、七	七、一五
同九年	五五	二六	三六、七	六、一	六、一〇	七、一三
平均	五四	二六	三七、四	七、三	六、一三	七、一三

第一化期被害莖中ノ存在蟲數調査（大正五、六ノ二ケ年平均）

四日市附近、晩稻神力　六月二十日植

調査期 ＼ 調査區別	一葉又ハ一葉鞘一部變色セルモノ	二葉及二葉鞘ニ亘リ變色セルモノ	三葉又ハ三葉鞘ニ亘リ變色セルモノ	殆ンド變色枯死シ一部青色ヲ有スルモノ	全葉至變色枯死セルモノ
移植後二十日目	六一％	五三％	三七％	一七％	〇、三％
同三十日目	七五％	五〇％	二五％	二二％	〇、五％
同四十五日目	七一％	三四％	一〇％	五％	〇、五％
同五十五日目	六〇％	二六％	八％	五％	四、五％

備考　本表ハ各三百本宛ノ被害莖中螟蟲ノ存在セシ莖數ノ百分率ヲ示ス

蛹期（夏季）

年度	最長	最短	總平均	雌ノミノ平均	雄ノミノ平均	七月下旬採集蛹ニ對スル羽化最歩合	同上羽化歩合	羽化蟲雌雄歩合 雌	羽化蟲雌雄歩合 雄	化蛹最初	同上最後
大正五年	一〇日	日	七、五日	七、四日	七、六日	八三	七五	五二	四八	七、二九月	八、一九月
同六年	一一	五	七、六	七、三	七、八	七九	七三	四二	五八	七、二八	八、一〇
同七年	一〇	六	七、八	七、七	七、九	七六	六三	五〇	五〇	七、二二	八、一一
同八年	一三	六	八、四	八、〇	八、七	七六	六八	四五	五五	七、二三	八、一六
同九年	一三	七	八、九	八、九	八、九	八五	七〇	五四	四六	七、二八	八、一三
平均	一一、四	五、八	八、〇	八、二	八、二	七九、八	六九、八	四九	五一	七、二六	八、一四

成蟲壽命（第二化）

年度	最長	最短	總平均	雌ノミノ平均	雄ノミノ平均	羽化最初	上
大正五年	日	日	日	日	日	月	月
同六年	一二	四	六、八	六、四	七、二	八、三	八、一七
同七年	一五	三	七、三	七、一	七、四	八、二	八、二三
同八年	一一	三	六、五	六、五	六、六	八、三	八、二三
同九年	九	二	五、〇	五、〇	五、〇	八、五	八、二五
平均	一一、八	、〇	六、四	六、三	六、六	八、三	八、二二

夏季燈火ニ來集セル螟蛾ノ產卵（第二化）

年度	一雌ノ平均卵塊數	同上卵粒	一卵塊ノ平均卵粒
大正五年	一	一	一
同六年	一	一	一
同七年	三三	一二四	三七
同八年	三〇	二〇八	六九
同九年	三〇	一七六	五九
平均	三一	一六九	五五

螟蛾ノ卵囊內卵粒調查（大正六年第一化）

產卵前ノモノ

最多	最少	總平均
一〇〇八	六〇〇	八〇八

誘殺蛾

最多	最少	總平均
六九六	二八〇	五四二

産卵ニ關スル調査（第二化）

年度	羽化ヨリ産卵迄ノ日數 最長	最短	總平均	一雌ノ産卵期間 最長	最短	總平均	一雌ノ産卵塊數 最多	最少	總平均	一雌ノ産卵粒數 最多	最少	總平均
大正五年	日	日	日	日	日	日						
同六年	四	二	二、八	七	三	四、八	一五	一	五、八	四二六	二二	一八五
同七年	五	二	二、八	七	一	三、二	一〇	一	三、六	四六七	一四	一八八
同八年	五	二	二、七	八	一	四、三	一四	一	五、八	四七四	三〇	二〇九
同九年	五	二	二、四	七	一	三、〇	一三	一	三、四	四六六	三一	一八六
平均	四、八	二	二、七	七、三	一、五	三、八	一三	一	四、七	四五八	二四	一九二

卵期（第二化）

年度	最長	最短	總平均	一卵塊ノ卵粒數 最多	最少	總平均	孵化歩合	産卵最初	同上最後	孵化最初	同上最後
大正五年	七日	四日	五、〇日	一	一	一	一	一月	一月	一月	一月
同六年	八	四	五、九	一三五	六	六〇	九三	八、七	八、二九	八、一五	九、三
同七年	八	五	六、九	二一一	三	五八	九六	八、二	八、二五	八、一〇	八、三〇
同八年	九	五	六、六	三三三	五	四七	九七	八、一〇	八、三〇	八、一七	九、七
同九年	九	四	五、五	三三三	三	五二	九九	八、六	八、三一	八、一二	九、八
平均	八、二	四、四	六、〇	二五六	四	五四	九六	八、六	八、二九	八、一四	九、四

大正十年八月十七日印刷
大正十年八月二十日發行

農商務省農務局

東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷人　金澤求也
東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷所　元眞社

農務局報目錄

番號	書名	發行年月	發賣所	定價	郵稅
第一號	柑橘類より枸櫞酸を製造する方法(其一)	大正四年九月	非賣品		
第二號	米麥品種改良に關する參考資料	大正五年六月	同		
第三號	柑橘類より枸櫞酸を製造する方法(其二)	同 年十一月	同		
第四號	米麥貯藏に關する參考資料	大正六年九月	同		
第五號	大正六年度道廳府縣に於ける米麥品種改良事業要覽	同 年十二月	大日本農會	80	4
第六號	主要食糧農產物改良增殖に關する參考資料	大正七年六月	同	絕版	
第七號	桑苗に關する調査	同 年九月	非賣品		
第八號	茶業要覽	大正八年一月	同		
第九號	穀物倉庫の建築要綱	同 年一月	大日本農會	80	4
第十號	天蠶柞蠶の微粒子病に關する調査	同 年三月	非賣品		
第十一號	府縣に於ける米麥多收穫共進會に關する規則一覽	同 年五月	同		
第十二號	主要食糧農作物品種改良事業要覽	大正九年四月	大日本農會	60	2
第十三號	籾殼を燃料に用うる方法	同 年四月	同	10	2
第十四號	日本內地に於ける主要食糧農產物の生產貿易及市價要覽	大正十年一月	非賣品		
第十五號	米穀要覽	同 年一月	同		
第十六號	肥料要覽	同 年一月	同		
第十七號	園藝業要覽	同 年一月	同		
第十八號	糖業要覽	同 年三月	同		
第十九號	稻二化性螟蟲驅除豫訪奬勵指針	同 年五月	大日本農會	65	2

D
1-4
518